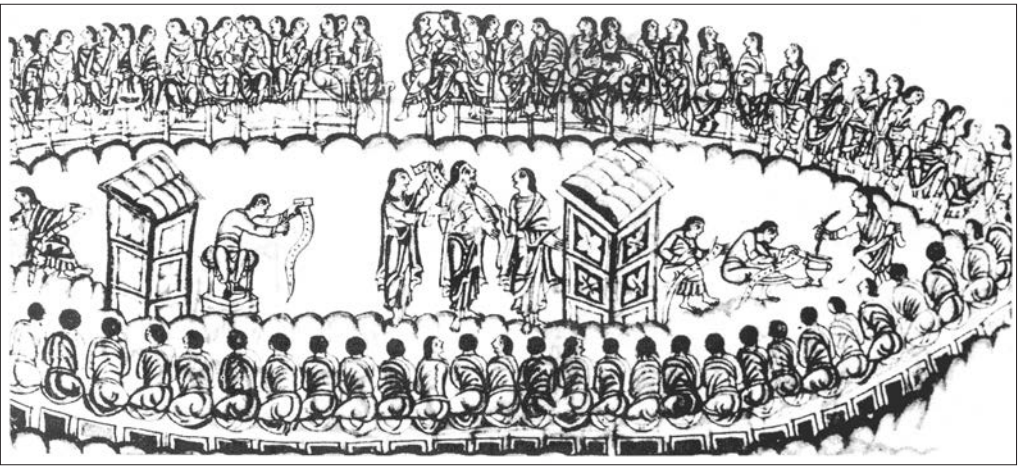
日本中世英語英文学会
第40回全国大会
プログラム・発表要旨

時：2024年12月7日（土）・12月8日（日）
所：福井大学（文京キャンパス）

The 40th Congress
The Japan Society for Medieval English Studies
7-8 December 2024
Fukui University (Bunkyo Campus)



日本中世英語英文学会

目　　次

会長挨拶…… 3
会場案内…… 4
　　会場までのアクセス…… 5
　　福井大学詳細図…… 7
　　会場見取り図…… 8
プログラム　第１日　12月７日（土）……10
　　第２日　12月８日（日）……12
Programme　Saturday 7 December……14
　　Sunday 8 December ……16
発表要旨　第１日　12月７日（土）　研究発表Ⅰ ……18
　　研究発表Ⅱ ……20
　　特別シンポジウム ……21
　　第２日　12月８日（日）　研究発表Ⅲ ……25
　　研究発表Ⅳ ……26
　　研究発表Ⅴ ……27
　　ラウンドテーブル ……28

10月31日（木）[必着] までに，申し込みフォーム：
https://forms.gle/FhivSgTBV2bprBx4A （学会 ML 経由推奨），
（あるいは同封の葉書で）ご出欠をお知らせください。

＊出張証明書が必要な方は，その旨をご記入ください。
＊＊出欠回答用葉書の郵送を希望されない方には，葉書を同封しておりません。

大会準備委員

藤井香子（委員長）　井口　篤（副委員長）
岡﨑久美子　小河　舜　新川清治　泉類尚貴　渡辺直子

開催校委員

Dylan Jones

事務局

〒175-8571　東京都板橋区高島平１丁目９－１
大東文化大学文学部　英米文学科　小池剛史研究室内
連絡先：jsmes.2023.2024@gmail.com

会 長 挨 拶

会員の皆様

第40回全国大会にようこそ！コロナ禍を乗り越え，昨年は4年ぶりに対面での大会が実現しましたが，今回も引き続き対面での開催の運びとなります。開催校である福井大学のJones先生のご尽力に対し厚く御礼申し上げます。今回，海外の研究者を招聘しての特別シンポジウムやラウンドテーブル，予想を超える数の研究発表があり，使用教室を追加するほどの充実した内容となっております。また懇親会やエクスカーション企画もあり学会創立40周年にふさわしい大会となることと思います。会員の皆様の多数のご参加をお待ちしております。

ご多忙の中，今回の大会プログラムの作成と大会実施に，ご尽力くださった藤井委員長をはじめとする大会準備委員の先生方，平日休日祝日昼夜を問わず精力的に仕事をして下さった小池事務局長，いつも有益な助言をくださった家入副会長，継続して今年も技術面を強力にサポートして下さった柳先生，そして大会に関わられた関係の皆様に衷心より御礼申し上げます。

それでは越山若水の地，福井でお会いしましょう。

2024年10月吉日

日本中世英語英文学会
会長　**鈴木　敬了**

会 場 案 内

1．受付は，12月７日（土）10:00-16:00および12月８日（日）8:30-10:50に，総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）１Ｆエントランスロビーにて行われます。（※ 受付では，一般会員の年会費徴収は行いません。）
2．当日会員会費は，一般1,000円，学生・定年退職者500円です。
3．ハンドアウトは，各発表会場で配布します。
4．大会本部は，総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）2F 222S 講義室です。
5．会員控室は，総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）１Ｆエクセルルームです。12月７日（土）10:00頃からご利用いただけます。
6．司会者・発表者控室は，総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）３Ｆ 231M 講義室です。
7．書店展示は，総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）２Ｆ 221M 講義室にて行われます。
8．ポスターセッションは，12月７日（土）10:00-12:00に，書店展示と同じ，総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）２Ｆ 221M 講義室にて行われます。
9．懇親会は，12月７日（土）18:00から学生支援センター内１Ｆ学生食堂カフェテリア味菜にて行われます。懇親会費（一般 5,000円，学生 3,000円）は，当日受付でお支払いください。
10. ご来場は公共交通機関をご利用ください。一方で車でのご来場は可能です。正門において警備員に申し出て頂き，ナンバーを登録後100円をお支払い下さい。
11. キャンパス内は指定屋外喫煙場所以外，全面的に禁煙です。喫煙は屋外喫煙場所の区画内でお願いします。
12. キャンパス内の食堂は土曜・日曜休業です。大学周辺には２～３店舗ほどありますが，日曜は休業の場合もありますので，福井駅周辺をご利用頂くことをお薦めします。福井駅周辺にはコンビニや食堂が多数あります。
13. 当学会では宿泊施設の斡旋は行っていません。

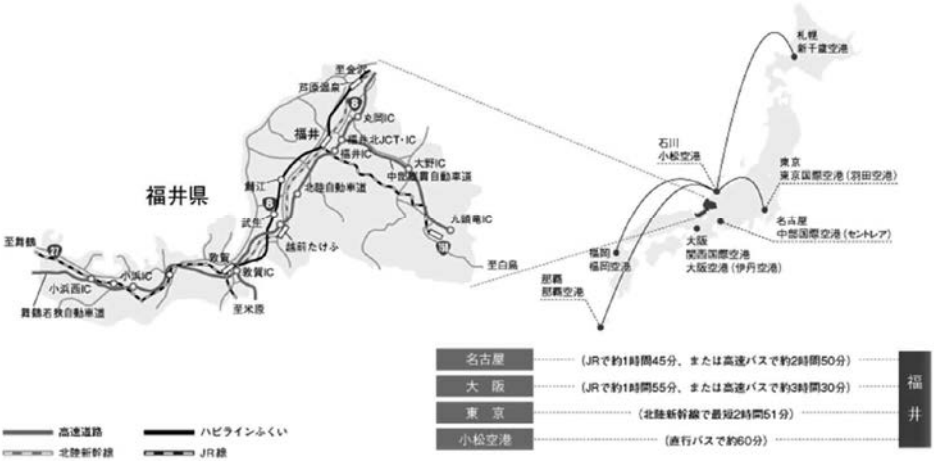
連　絡　先

福井大学（文京キャンパス）
〒910-8507 福井県福井市文京３丁目９番１号
（大会本部：総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）2F 222S 講義室）
開催校連絡先：jones@u-fukui.ac.jp

会場までのアクセス

福井まで

- 名古屋／電車で約１時間45分，または，バスで約２時間50分
- 大阪／電車で約１時間55分，または，バスで約３時間30分
- 東京／北陸新幹線で最短２時間51分
- 小松空港／直行バスで約60分



福井駅から文京キャンパスまで

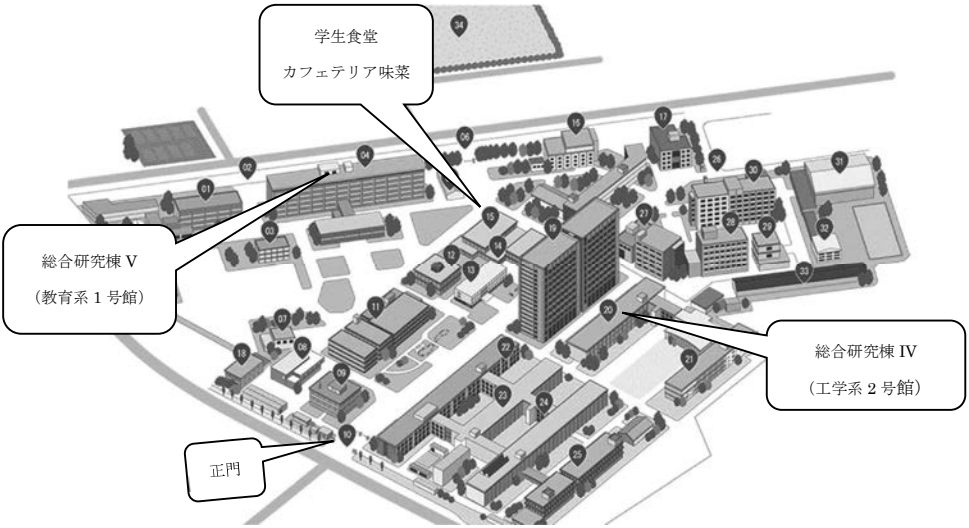
- 鉄道／えちぜん鉄道福井駅－（約10分）－福大前西福井駅［えちぜん鉄道福井駅より三国芦原線に乗車］
  ＊福大前西福井駅から正門まで徒歩２分
  ／福井鉄道福井駅－（約10分）－田原町駅［福井鉄道福井駅より福武線田原町方面行きに乗車］
  ＊田原町駅から東門まで徒歩７分，または，えちぜん鉄道三国芦原線三国方面行きに乗り換え
- バス／京福バス福井駅－（約10分）－福井大学前停留所［JR 福井駅西口バスターミナル２番のりばより乗車］
- タクシー／福井駅－（約10分）－福井大学文京キャンパス［必ず「福井大学文京キャンパス」と伝えてください］
- 自家用車／北陸自動車道 福井北 JCT・IC から国道416号線で西へ約７km または福井 IC から国道158号線で西へ約８km。自家用車での入構は有料となります。

文京キャンパス（教育学部・工学部・国際地域学部）への入構について

- 一時的に自動車で入構を希望する場合
  本学にて開催される行事等の参加者，取引業者，臨時入構の許可を得た教職員・学生等は，一時的に自動車で入構することができます。

（福井大学ホームページ「アクセス」より一部転載）

福井大学（文京キャンパス）詳細図



（福井大学ホームページ「キャンパスマップ」より一部転載）

学会場詳細案内

総合研究棟Ⅳ（工学系2号館）

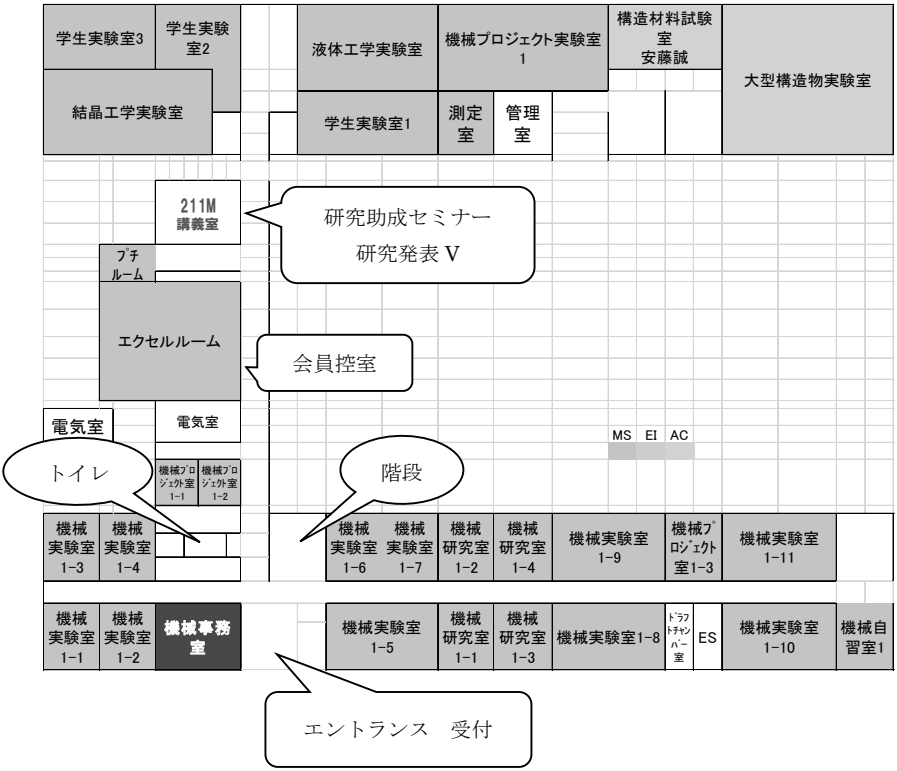
1F	受付	エントランスロビー
	会員控室	エクセルルーム
	研究助成セミナー・研究発表Ⅴ	211M 講義室
2F	大会本部	222S 講義室
	開会式・総会・研究発表Ⅰ・特別シンポジウム 研究発表Ⅲ・ラウンドテーブル・閉会式	223L 講義室
	研究発表Ⅱ・研究発表Ⅳ	224M 講義室
	ポスターセッション・書店展示	221M 講義室
3F	評議員会，司会者・発表者控室	231M 講義室

編集委員会（大会前日）：総合研究棟Ⅴ（教育系１号館）1F 多目的会議室
大会準備委員会 他（大会前日）：総合研究棟Ⅴ（教育系１号館）1F 大会議室

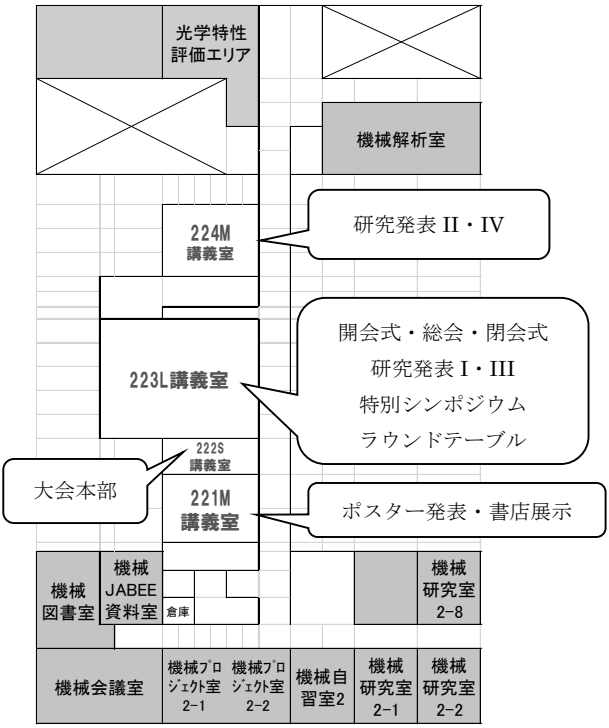
会場見取り図

【総合研究棟Ⅳ（工学系2号館）レイアウト】

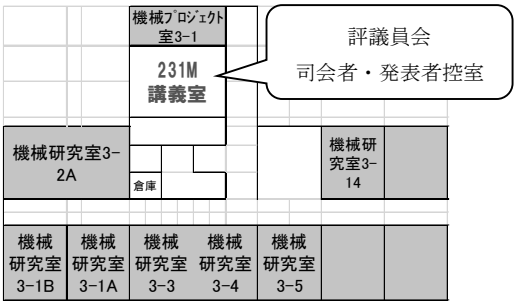
1階



2階


光学特性
評価エリア
機械解析室
224M
講義室
研究発表 II・IV
223L講義室
開会式・総会・閉会式
研究発表 I・III
特別シンポジウム
ラウンドテーブル
222S
講義室
大会本部
221M
講義室
ポスター発表・書店展示
機械
図書室
機械
JABEE
資料室
倉庫
機械
研究室
2-8
機械会議室
機械ﾌﾟﾛ
ｼﾞｪｸﾄ室
2-1
機械ﾌﾟﾛ
ｼﾞｪｸﾄ室
2-2
機械自
習室2
機械
研究室
2-1
機械
研究室
2-2

3階


機械ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ
室3-1
231M
講義室
評議員会
司会者・発表者控室
機械研究室3-
2A
倉庫
機械研
究室3-
14
機械
研究室
3-1B
機械
研究室
3-1A
機械
研究室
3-3
機械
研究室
3-4
機械
研究室
3-5

日本中世英語英文学会　第40回全国大会プログラム

2024年12月７日（土）・12月８日（日）
福井大学（文京キャンパス）
〒910-8507 福井県福井市文京３丁目９番１号
（大会本部：総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）2F 222S 講義室）
開催校連絡先：jones@u-fukui.ac.jp

第１日　12月７日（土）

10:00～16:00　受付（総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）１Ｆエントランスロビー）
＊会員控室（総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）1F エクセルルーム）

10:00～12:00　ポスターセッション（総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）2F 221M講義室）

12:10～12:40　開会式・総会（総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）2F 223L講義室）
司会　小池剛史（大東文化大学）
開会の言葉　会長　鈴木敬了（大東文化大学）
議事
事務局報告　事務局長　小池剛史（大東文化大学）
編集委員会報告　編集委員長　狩野晃一（明治大学）
大会準備委員会報告　大会準備委員長　藤井香子（大阪大学他非常勤講師）
大会案内　開催校委員　Dylan Jones（福井大学）

12:55～15:15　研究発表Ⅰ（総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）2F 223L講義室）

12:55～13:35　司会　和田　忍（駿河台大学）
１. *Beowulf* と *Andreas* における関係代名詞の比較
田尻小夏（京都大学大学院）
13:45～14:25　司会　小塚良孝（愛知教育大学）
２. sume niht―例外的副詞的対格，あるいは女性具格―
中西志門（三重大学）
14:35～15:15　司会　伊藤　尽（信州大学）
３. 古英詩に用いられた *for*-verbs　小倉美知子（千葉大学名誉教授）

12:55～15:15　研究発表Ⅱ（総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）2F 224M 講義室）

12:55～13:35　司会　龍　美也子（独立研究者）

４．中英語韻文作品における複合数詞

木原桃子（慶應義塾大学大学院）

13:45～14:25　司会　寺澤　盾（青山学院大学）

５．後期中英語における形容詞を伴う非人称構文の統語的考察

福元智子（京都大学大学院）

14:35～15:15　司会　三浦あゆみ（東京大学）

６．中英語聖書における法助動詞選択：テキスト間の差異の分析から

佐藤信正（独立研究者）

15:30～17:30　特別シンポジウム（総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）2F 223L 講義室）

“Literary and Cultural Exchanges between England and Scandinavia from the 11th to the 14th Century”

司会・総論　伊藤　尽（信州大学）

１．Vǫlundr-legend and Its Reception in Anglo-Scandinavian Areas from the Early to the Late Middle Ages

伊藤　尽（信州大学）

２．Social Integration and Anglo-Scandinavian Identity in the Story of Havelok

岡本広毅（立命館大学）

３．The Role of Lincoln in the Transmission of the Old English Epic *Beowulf* to *Grettis Saga*

Richard NORTH（University College, London）

４．The Introduction of Courtly Culture to Late Medieval Norway and Iceland through England

松本　涼（福井県立大学）

18:00～20:00　懇親会（学生支援センター内　学生食堂 カフェテリア味菜）

第２日　12月８日(日)

8:30～10:50　受付（総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）1F エントランスロビー）
＊会員控室（総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）1F エクセルルーム）

9:00～10:30　研究発表Ⅲ（総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）2F 223L 講義室）

9:00～9:40　司会　片見彰夫（青山学院大学）
７．高等教育機関における英語史を取り入れた実践型英語教育について
―高等専門学校における実践例―
岡田　晃（小山工業高等専門学校）
9:50～10:30　司会　不破有理（慶應義塾大学）
８．日本におけるアーサー王研究史―舟橋雄のこと
海老久人（神戸女子大学名誉教授）

9:00～10:30　研究発表Ⅳ（総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）２F 224M 講義室）

9:00～9:40　司会　石黒太郎（明治大学）
９．２つの聖グースラーク伝の比較：フェリックスによるラテン語散文版と古英詩 *Guthlac A* との間の類似点および相違点
高山真梨子（慶應義塾大学大学院）
9:50～10:30　司会　市川　誠（東京理科大学）
10.『アングロ・サクソン年代記』E 写本における *The Rime of King William* の意義について
福田一貴（駒澤大学）

9:00～10:30　研究発表Ⅴ（総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）1F 211M 講義室）

9:00～9:40　司会　堀田隆一（慶應義塾大学）
11. 初期中英語の韻文における「時」と「場所」を表す副詞句の順序について
高橋佑宜（神戸市外国語大学）
9:50～10:30　司会　野地　薫（駒澤大学他非常勤講師）
12.「賄い屋の話」から見る『カンタベリー物語』の「巡礼」の変容について
本田崇洋（福島工業高等専門学校）

10:40～12:20　ラウンドテーブル（総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）2F 223L 講義室）

「承前啓後―日本におけるこれからの中世英語英文学研究を考える」

司会　Britton BROOKS（九州大学）

狩野晃一（明治大学）

１．インターネット時代の中世英語英文学研究

唐澤一友（立教大学）

２．古英語・英語史の発信とその課題

小河　舜（上智大学）

３．日本における中英語研究はどう変わりうるか

三浦あゆみ（東京大学）

４．オープンサイエンス時代における開かれた中世英文学研究？

徳永聡子（慶應義塾大学）

５．「それに彼は，海外でより多く話題になっている」：アーサー王物語の日本語への翻訳

小宮真樹子（近畿大学）

12:20～12:30　閉会式（総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）2F 223L 講義室）

閉会の言葉　　副会長　家入葉子（京都大学）

13:00～　エクスカーション（永平寺へ）＊希望者のみ（別途，申し込み必要）

PROGRAMME

SATURDAY 7 DECEMBER

10:00～16:00 Registration (Entrance Lobby, 1F, Engineering Building No. 2)
*Members' Waiting Room (Excel Room, 1F, Engineering Building No. 2)

10:00～12:00 Poster Session (Lecture Room 221M, 2F, Engineering Building No. 2)

12:10～12:40 Plenary Session (Lecture Room 223L, 2F, Engineering Building No. 2)
Moderator: KOIKE, Takeshi, Daito Bunka University
Opening Address SUZUKI, Hironori,
President of JSMES, Daito Bunka University
Business Announcements

12:55～15:15 Paper Session I (Lecture Room 223L, 2F, Engineering Building No. 2)

12:55～13:35 Moderator: WADA, Shinobu, Surugadai University
1. A Comparison of Relative Pronouns in *Beowulf* and *Andreas*
TAJIRI, Konatsu, Graduate School, Kyoto University

13:45～14:25 Moderator: KOZUKA, Yoshitaka, Aichi University of Education
2. sume niht — An Exceptional Use of the Adverbial Accusative or the Instrumental Feminine —
NAKANISHI, Shimon, Mie University

14:35～15:15 Moderator: ITO, Tsukusu, Shinshu University
3. *For*-Verbs in Old English Poems
OGURA, Michiko, Professor Emeritus, Chiba University

12:55～15:15 Paper Session II (Lecture Room 224M, 2F, Engineering Building No. 2)

12:55～13:35　Moderator: RYU, Miyako, Independent Researcher

4. Compound Numerals in Middle English Metrical Texts

KIHARA, Momoko, Graduate School, Keio University

13:45～14:25　Moderator: TERASAWA, Jun, Aoyama Gakuin University

5. A Syntactic Study of Impersonal Constructions Used with Adjectives in Late Middle English

FUKUMOTO, Tomoko, Graduate School of Letters, Kyoto University

14:35～15:15　Moderator: MIURA, Ayumi, The University of Tokyo

6. Modal Auxiliary Verb Selection in the Middle English Bible: An Analysis of Variation across Texts

SATO, Nobumasa, Independent Researcher

15:30～17:30　Special Symposium (Lecture Room 223L, 2F, Engineering Building No. 2)

"Literary and Cultural Exchanges between England and Scandinavia from the 11th to the 14th Century"

Moderator: ITO, Tsukusu, Shinshu University

1. Vǫlundr-legend and Its Reception in Anglo-Scandinavian Areas from the Early to the Late Middle Ages

ITO, Tsukusu, Shinshu University

2. Social Integration and Anglo-Scandinavian Identity in the Story of Havelok

OKAMOTO, Hirohi, Ritsumeikan University

3. The Role of Lincoln in the Transmission of the Old English Epic *Beowulf* to *Grettis Saga*

Richard NORTH, University College, London

4. The Introduction of Courtly Culture to Late Medieval Norway and Iceland through England

MATSUMOTO, Sayaka, Fukui Prefectural University

18:00～20:00　Reception (Cafeteria 味菜)

SUNDAY 8 DECEMBER

8:30～10:50 Registration (Entrance Lobby, 1F, Engineering Building No. 2)
*Members' Waiting Room (Excel Room, 1F, Engineering Building No. 2)

9:00～10:30 Paper Session III (Lecture Room 223L, 2F, Engineering Building No. 2)

9:00～9:40 Moderator: KATAMI, Akio, Aoyama Gakuin University

7. Practical English Education with History of English in Higher Education Institutions : Practical Example in National Institute of Technology
   OKADA, Akira, National Institute of Technology, Oyama College

9:50～10:30 Moderator: FUWA, Yuri, Keio University

8. On Takeshi Funahashi as a Pioneering Medievalist and His Arthurian Study in the Meiji Era
   EBI, Hisato, Professor Emeritus, Kobe Women's University

9:00～10:30 Paper Session IV (Lecture Room 224M, 2F, Engineering Building No. 2)

9:00～9:40 Moderator: ISHIGURO, Taro, Meiji University

9. Comparison of Two Lives of St. Guthlac: Similarities and Differences between Felix's Latin Prose Version and the Old English Verse *Guthlac A*
   TAKAYAMA, Mariko, Graduate School, Keio University

9:50～10:30 Moderator: ICHIKAWA, Makoto, Tokyo University of Science

10. On the Significance of *The Rime of King William* in the E Manuscript of the *Anglo-Saxon Chronicle*
    FUKUDA, Kazutaka, Komazawa University

9:00～10:30 Paper Session V (Lecture Room 211M, 1F, Engineering Building No. 2)

9:00～9:40 Moderator: HOTTA, Ryuichi, Keio University

11. On the Order of Adverbials Expressing Time and Place in Early Middle English Poetry

TAKAHASHI, Yuki, Kobe City University of Foreign Studies

9:50～10:30 Moderator: NOJI, Kaoru, Komazawa University

12. One Aspect of Transition of Chaucer's Pilgrimage: A Study through "The Manciple's Tale"

HONDA, Takahiro, National Institute of Technology, Fukushima College

10:40～12:20 Round Table (Lecture Room 223L, 2F, Engineering Building No. 2)

"The Future Past: JSMES and Medieval English Studies in the Coming Ages"

Moderators: Britton BROOKS, Kyushu University

KANO, Koichi, Meiji University

1. Medieval English Studies in the Age of the Internet

KARASAWA, Kazutomo, Rikkyo University

2. Raising the Public Profile of Old English and the History of the English Language in Japan

OGAWA, Shun, Sophia University

3. How Are Middle English Studies in Japan Likely to Change?

MIURA, Ayumi, The University of Tokyo

4. Opening up Middle English Studies in the Age of Open Science?

TOKUNAGA, Satoko, Keio University

5. "And Also He Is More Spoken of beyonde the See": How to Translate Arthurian Tales into Japanese

KOMIYA, Makiko, Kindai University

12:20～12:30 Closing Address (Lecture Room 223L, 2F, Engineering Building No. 2)

IYEIRI, Yoko, Vice-President of JSMES, Kyoto University

13:00～ Excursion (To Eiheiji Temple) (Applicants only)

発表要旨

第1日　12月7日(土)

12:55～15:15　研究発表Ⅰ（総合研究棟 IV（工学系２号館）2F 223L 講義室）

12:55～13:35　司会　和田　忍（駿河台大学）

１．*Beowulf* と *Andreas* における関係代名詞の比較

田尻小夏（京都大学大学院）

古英語作品で観察される関係代名詞は主に，不変化詞を用いる *pe*-relatives, 指示詞を用いる *se*-relatives, 複合型の *sepe*-relatives の３タイプが挙げられる。これらの使い分けについては，厳密な規則はなく傾向にとどまる（Mitchell 1985: §2270; Traugott 1992: 223）とされており，作品ごとの傾向を指摘する研究も多い。中でも *Beowulf* を対象とした先行研究では，同時代の他作品と比較して *sepe*-relatives の頻度が高いことが指摘されている（Mitchell 1963, 1985; Sundquist 2002; Troup 2010）。

本発表では，*Beowulf* を地の文と登場人物による発話と見做される部分に分けて分析することで，従来 *Beowulf* の特徴とされてきた *sepe*-relatives の頻度の高さが特に地の文の特徴を反映したものであることを明らかにする。また，*Beowulf* との類似が指摘される *Andreas* についても同様の手法で調査し，２つの作品間で比較を行う。

比較を通して，*Beowulf* で確認された地の文と発話文における各関係代名詞の傾向の違いが *Andreas* についても見られるのかという点について考察する。

13:45～14:25　司会　小塚良孝（愛知教育大学）

２．sume niht―例外的副詞的対格，あるいは女性具格―

中西志門（三重大学）

古英語において名詞の曲用系が時間的意味を表す際，対格は継続的意味を表すとされている。ラテン語の奪格を範に継続的意味を表すこともあるが，典型的には時点や反復を表す与格とは異なり，対格は古英語期を通じて継続を表す主要な表現形式であり，前置詞句との競合度合いも与格に比べて低かった。

しかし，語形から対格とされる sume/ælce/æghwylce niht(e) という副詞表現は明確に時点を表す文脈でも用いられる上，与格の同義表現 sumre niht(e)

が存在する。Mitchell (1985: §1424) は，このように意味的に通常の副詞的対格から逸脱する形式が男性具格からの類推による形式である可能性を示唆しているが，具体的な検討は行っていない。

そこで発表者は sume niht(e) などの形式が，男性具格 sume dæge などを範として成立した女性具格である可能性を検証する。一般に具格に女性形は存在しないとされるが，同様の文脈で生起する sume dæge は生起頻度が高く，類推のソースとしては十分に機能しうると思われる。時間以外の文脈（同伴，手段）においても，ラテン語 voce magna 'with a loud voice'の訳として与格形 micre stefne と並んで micle stefne という形式が見られることから，女性具格形の存在は蓋然性が高いと思われる。

調査に際しては DOEC から女性名詞が時点を表す例に加えて，道具や様態の意味で用いられる例を収集，検討する。時間名詞に関しては Bede の『英国民教会史』と Gregorius Magnus の『対話篇』に，stefn の用例は複数の『福音書』写本に用例が見られるため，これらの作品を写本間の異同にも留意しながら調査し，具格としての解釈が妥当かを検討する。

14:35～15:15　司会　伊藤　尽（信州大学）

3．古英詩に用いられた *for*-verbs

小倉美知子（千葉大学名誉教授）

ドイツ語では前綴り *ver-* が付くことにより，反意ないしはかなり異なる意味になり得る動詞がある。古英語でも *seon* 'to see' に対する *forseon* 'to neglect'，*standan* 'to stand' に対する *forstandan* 'to withstand; understand' のような例がある。殆どの場合は *for-* によって意味が強調されるか（e.g. *forbrecan* 'to break in pieces'）拡張される（e.g. *forbigan* 'to bow down'）が，先に挙げたようなゲルマン的特徴である反意を表す動詞が残っていて興味深い。*For*-verbs は散文や行間注釈では元のラテン語の訳や，難解な文脈の解説に用いられたり，法律書や医学書などの特殊用語として用いられたりする傾向がある。では詩の場合はどのような理由で用いられるのか，それを調査し報告するのが，今回の発表の目的である。

12:55〜15:15　研究発表Ⅱ（総合研究棟 IV（工学系２号館）2F 224M 講義室）

12:55〜13:35　司会　龍　美也子（独立研究者）

４．中英語韻文作品における複合数詞

木原桃子（慶應義塾大学大学院）

英語における数詞は，古くからその体系や形態を変化させており，one や ten のような語の起源や形態の変遷は，現在に至るまで多くの研究者によって論じられている。しかしその一方で，現代英語における twenty-one のような複合数詞と呼ばれるものに対して，包括的に調査を行なっている研究は数少ない。特に，中英語期において，様々な構造の複合数詞が出現する条件や twenty-one のような構造に収束していった要因は，十分明らかにされているとは言い難い。

本発表では，主に *The Story of England* のような韻文作品を扱い，制作された年代・地域や翻訳元の作品の影響を考慮しつつ，作品中に出現する複合数詞の構造やそれらと共起する語にどのようなものが見られるかについて確認し，脚韻の位置に現れるか否かによって複合数詞が異なる構造をとる傾向があることを論じる。さらに，中英語期に制作された *Polychronicon* のような散文作品に現れる複合数詞についても調査を行ない，韻文作品における傾向と比較し考察することで，中英語期の作品における複合数詞のふるまいを整理する足がかりとしたい。

13:45〜14:25　司会　寺澤　盾（青山学院大学）

５．後期中英語における形容詞を伴う非人称構文の統語的考察

福元智子（京都大学大学院）

中英語における非人称構文の中には，よく知られている非人称動詞の他に，形容詞と be 動詞からなる形容詞型の非人称構文も存在する。形容詞型は，非人称動詞と同じく人称項の交替を伴うだけではなく，動詞 be と have が交替することがある。形容詞 leef を用いる場合，非人称構文は be 動詞，人称構文は have を伴いやすいという傾向が指摘されている（Ohno 2018）。形容詞型の非人称構文について，従来行われてきた個別作品における調査では，後期中英語全体における生起分布は明らかにされていない。また，これまで非人称動詞の非人称構文から人称構文への移行には，目的格の人称項と主格の人称項との意味論的な違いが関与していると示唆されてきたが，形容詞型についても詳細に

検討する余地が残されている。そこで本発表では，形容詞型の非人称構文に焦点を当て，Corpus of Middle English Prose and Verse から用例を収集し，統語的観点から生起環境が人称項や動詞の交替に及ぼす要因を考察する。さらに，意味論的な差異についても検討する。

14:35～15:15　司会　三浦あゆみ（東京大学）

６．中英語聖書における法助動詞選択：テキスト間の差異の分析から

佐藤信正（独立研究者）

この研究では，中英語聖書成立に関わる５つのテキスト（原典ラテン語聖書，中英語聖書の前期版２つ，後期版２つ）及び初期近代英語聖書の，全６つのテキストを対象に，法助動詞がどのように選択されているかという観点で差異の分析をした。前期版間の比較により，従来後期版との差と見られていた修辞的な差異が前期版間で既に生じていて，後期版との差異はより文法的な差異であることが明確になった。また，ラテン語未来完了に対応する法助動詞としての shul が他の同形態の shul から機能的に分離できた。原典のラテン語聖書との対比からは，中英語聖書の法助動詞は実体的な語参照（may/might 及び will/would）と屈折の代理（shall/should）の２種類に分類でき，さらに法助動詞 shall については文構造によって異なる文法機能を持つこともわかった。初期近代英語聖書との対比からは，法助動詞 may が法助動詞 can に置き換わり，法助動詞 may は新しい屈折の代理となることや，法助動詞全体がモダリティ表示の性質を強く帯びる様子が伺えた。

15:30～17:30　特別シンポジウム（総合研究棟IV（工学系２号館）2F 223L講義室）

“Literary and Cultural Exchanges between England and Scandinavia from the 11th to the 14th Century”

司会・総論　ITO, Tsukusu（Shinshu University）

It has often been explained that the ending of Viking Age took place when the last Norwegian invasion into England by Haraldr Harðráði (with Tostig) was hindered by the army of the last Anglo-Saxon king, Harold II, in 1066. It is not, however, the end of interaction between England and Scandinavia. The relationship among the peoples in the North Sea area continued even into the Middle English period. Yet, how they retained the connection has neither necessarily been understood nor fully explained by Japanese scholars;

in fact, little attention has been paid in Japan to the post-Anglo-Saxon North Sea interaction. This symposium, in these circumstances, is an attempt to cast a light upon the shady fields in medieval English studies. The first paper deals with stone sculptures in the former Danelaw area which tell of a legend which in turn was recorded in the 12th century Icelandic manuscript. Handling the stories of Havelok, which was propagated around Lincoln, where the Danish immigrants are presumed to have settled densely, the second paper insists that the idea of a local hero developed from the historical facts and the people's literary imagination based on them. The third paper introduces the significant role of Lincoln to connect Old English *Beowulf* and other later legends. Finally, the fourth paper reveals its historical analyses of the background of literary interpretations of the previous papers, which serves to strengthen the argument.

1. Vǫlundr-legend and Its Reception in Anglo-Scandinavian Areas from the Early to the Late Middle Ages

ITO, Tsukusu (Shinshu University)

This paper deals with a cultural link in relation to Vǫlundr/Wayland-legend between Northern England and Iceland/Norway. In my view, an eddic poem *Vǫlundarkviða* was composed and circulated among the Anglo-Scandinavian cultural area since Viking Age to late medieval period.

McKinnel (1990, 2001) concludes that the origin of *Vǫlundarkviða* is 'unanswerable', while Dronke (1997) surmises that it was composed by an Icelandic poet. On the other hand, they both not only acknowledge the stone sculptures depicting the legend in Danelaw area as well as the influence of Old English, but refer to late medieval literary works; McKinnel to Laȝamon's *Brut* and Dronke to the thirteenth century *Þiðreks Saga*. The tradition seems to have been closely connected with Wada legend in Old English culture. Despite the fact that the linking of Wada (ONorw *Vaði*) had been apparently obscured in Laȝamon, both OE *Waldere* and ONorw *Þiðreks saga* witness the existence of the tradition in early to late Middle Ages. This fact suggests that a cultural link around *Vǫlundarkviða* was sufficiently influential around the North Sea area until the thirteenth century; actually, the only manuscript, GKS 2365 4to, which preserved *Vǫlundarkviða* was written in late

thirteenth century Iceland.

Based on these studies, I will provide a refreshed view focusing on *Vǫlundarkviða,* linking England and Scandinavian areas with linguistic and cultural significance.

2. Social Integration and Anglo-Scandinavian Identity in the Story of Havelok

OKAMOTO, Hiroki (Ritsumeikan University)

The circulation of various versions of the Havelok story attests to its robust popularity in medieval England. Among these, the Middle English romance *Havelok* is particularly interesting for its depiction of a harmonious synthesis of English and Danish inhabitants in England. While the chronicles are concerned with the Danish Prince Havelok in the historical context of royal succession, the Middle English poem, divorced from any chronological setting, takes a different approach to the issue of Danish settlement and identity in England by depicting the process of Havelok's social integration into the fabric of local life. Havelok's unusual career as a fisherman's apprentice at Grimsby and his utilization of a trader's skill in Lincoln are emphasized in the poem, making him a local hero who dramatically revitalizes culture and commerce. The scene in which the locals accord him unprejudiced affection regardless of him being a Dane, merits comparison with the scene in which the distinction between "the English" and "the Danish" is drawn and politically deployed in the subsequent narrative. Examining several analogues of the Middle English *Havelok*, this paper reconsiders its literary significance in terms of cultural adaptation and identity.

3. The Role of Lincoln in the Transmission of the Old English Epic *Beowulf* to *Grettis Saga*

Richar NORTH (University Colloge, London)

Beowulf's fights with the Grendels in *Beowulf* appear to have influenced Grettir's fights in *Grettis saga* with the zombie Glámr (ch. 35) and with a troll-wife and cave-giant (ch. 65–66). The likeness between these two sets of

episodes is often explained by claiming a folktale common to both traditions, and yet there is stronger evidence for a loan. I shall argue that the saga borrowed not only from *Beowulf*, but also from the *Distichs of Cato*, from a version of the *Tristan* from the mid-twelfth century, and (following Andy Orchard) from the *Gesta Herwardi,* a biography of Hereward the Wake. I shall then suggest Lincoln as the university town through which these four texts passed from Angevin England to Iceland. At this time Lincolnshire was still the most Scandinavian region of England and preserved the tradition of Hereward's life. Lincoln was also where two Icelanders from Oddi came to learn canonical law, Þorlákr Þorhallsson in 1159–60 and his nephew Páll Jónsson (probably in Lincoln) in 1178–79. Moreover, Lincoln, through its bishops Alexander (1123–48) and Robert de Chesney (1148–66), is connected with three works of Geoffrey of Monmouth which were used in the *Merlínússpá* of Gunnlaugr Leifsson (d. 1219). Since Gunnlaugr's abbey, Þingeyrar, is believed to be where *Grettis saga* was written, probably a century earlier than its text, I shall conclude that *Beowulf* was brought there with these other works from Oddi, a generation after it had reached Iceland in the luggage of Þorlákr or Páll.

4. The Introduction of Courtly Culture to Late Medieval Norway and Iceland through England

MATSUMOTO, Sayaka (Fukui Prefectural University)

In the 13th century, Iceland experienced significant political and cultural shifts, including the spread of romance literature. This paper examines the historical background of how courtly culture was introduced to Norway and Iceland through England. Initially discovered and settled by Vikings in the 9th century, travel routes to Iceland were mainly from Norway via the Northern Isles and the Faroe Islands. Norwegian merchants controlled the routes after Iceland came under Norwegian rule in 1262–64. Through this route, continental European culture spread to the North Atlantic. In particular, the personal links between King Hákon IV Hákonarson (reign 1217–63) of Norway and King Henry III (reign 1216–72) of Plantagenet England facilitated cultural exchange. Under King Hákon, French literature was translated into Norwegian. Icelanders visiting the court transmitted it to

their homeland, where a new genre of chivalric tales (*riddarasögur*) was born. Compilations such as the *Hauksbók* (AM 544 4to, 1290–1360) presented a new worldview by combining translated Latin works with native literature. Thus, from the 14th century onwards, Iceland fostered a more European-oriented culture.

第2日　12月８日(日)

9:00～10:30　研究発表Ⅲ（総合研究棟 IV（工学系２号館）2F 223L 講義室）

9:00～9:40　司会　片見彰夫（青山学院大学）

７．高等教育機関における英語史を取り入れた実践型英語教育について―高等専門学校における実践例―

岡田　晃（小山工業高等専門学校）

昨今の高等学校指導要領では，コミュニケーション活動に「論理・表現Ⅰ～Ⅲ」が加わり，目的や場面，状況に応じてコミュニケーション能力を育成することが目標とされている。このような「発信型英語教育」では，相手に自分の意図を誤解なく伝える「正しい英語」を発話することに重点が置かれている。しかし，学生たちが感じる「英語の不思議」について教えることも重要だと考えている。近年，英語史を扱った英語教授法が提案されるようになり，指導者と学習者の双方で英語史の知識を持つことの重要性が少しずつ認知されてきた。本発表では，学生が将来のキャリアや今後の学習に備えるための指針であるモデルコアカリキュラムを採用している高等専門学校における英語史の役割を紹介するとともに,「英語の不思議」についてのアンケート調査結果を紹介し，英語教育における英語史の役割を発表の視点から考察し，その重要性を提案する。さらに，語源調査の主体的学習を可能にする OED Text Visualizer を使用した学習法を紹介する。

9:50～10:30　司会　不破有理（慶應義塾大学）

８．日本におけるアーサー王研究史―舟橋雄のこと

海老久人（神戸女子大学名誉教授）

本発表は，今では忘れられた舟橋雄（たけし）が，日本における「アーサー王」研究史に残した足跡を掘り起こす一試みである。

舟橋は，シラキュース，ボストン両大学で５年間，中世英文学を学び，1903／明治37年に帰国し，「青山学院高等科（現青山学院大学）」でその成果を講義した。当時，中世英語を読める日本人は稀少，もしくは，皆無だった。また，江戸の遺風が残る明治期の「アーサー王」受容には，「騎士道」から変質した日本固有の「武士道」への郷愁がつきまとっていた。しかし，1908／明治41年に発表された彼の最初の論文「聖盃説話に関してマロリーとテニソンとの比較」（1907／明治41年）は「イギリス性」（Englishness）の文脈から離れることはない。そして「聖盃」が一貫して彼の主題だった。

わが国の英文学界を牽引した磯辺弥一郎，舟生平蔵【齋藤の筆名】らが，舟橋は中世英語が読める「中世英文学者」だと認知している。彼の「聖盃」論は，わが国の「アーサー王」研究史に最初の一歩を踏み出した足跡として，今も記憶に値するだろう。

9:00～10:30　研究発表 IV（総合研究棟 IV（工学系２号館）2F 224M 講義室）

9:00～9:40　司会　石黒太郎（明治大学）

９．２つのグースラーク伝の比較：フェリックスによるラテン語散文版と古英詩 *Guthlac A* との間の類似点および相違点

高山真梨子（慶應義塾大学大学院）

イングランド生まれのグースラーク（d. 714）の聖人伝はアングロ・サクソン時代に複数残されている。最初の記録と考えられているのが修道士フェリックスによって書かれたラテン語散文で，同作品は古英語に散文形式で翻訳されている。さらに，古英語の韻文の形式でも聖人伝は記されており，それが *Guthlac A* および *Guthlac B* の２作品だが，そのうち後者はその内容からフェリックス作品を参照して制作されたことが明らかであるのに対し，前者については明らかではない。*Guthlac A* は内容的にフェリックス作品から大きく逸脱しており，詩人がフェリックス作品を参照したのかどうかは定かではない。本発表ではフェリックス作品と *Guthlac A* を比較し，２作品の間の類似点および相違点を再考し，その上で *Guthlac A* に特徴的な物語の展開について検討する。

9:50〜10:30　司会　市川　誠（東京理科大学）

10.『アングロ・サクソン年代記』E 写本における *The Rime of King William* の意義について

福田一貴（駒澤大学）

『アングロ・サクソン年代記』E 写本1086年の項目に *The Rime of King William* が記録されている。この E 写本にのみ記録のある韻文は，その詩形と題材の面から，現存する『アングロ・サクソン年代記』に含まれる韻文作品と比べると異質なものとみなされ，これまでそこまで多く研究がなされてきていない。しかし，E 写本の韻文作品の文脈に置いて考えてみると，この作品は E 写本内で然るべき意義を持っており，その意義は同写本の制作時に意図されたと思われる考えと関連があるように思われる。

そこで，本発表では，この韻文作品と文体が類似していると指摘される E 写本959年に記録されているエドガー王の即位に関する韻文との類似点を出発点とし，この韻文作品がノルマン王とそれ以前の時代の王との繋がりを示しており，その背景に当時よく用いられていた説教的な内容が反映されていることを示したい。結果として，これが，E 写本を制作する際に意図された考えの１つではないかということを提案していきたい。

9:00〜10:30　研究発表 V（総合研究棟 IV（工学系２号館）1F 211M 講義室）

9:00〜9:40　司会　堀田隆一（慶應義塾大学）

11. 初期中英語の韻文における「時」と「場所」を表す副詞句の順序について

高橋佑宜（神戸市外国語大学）

本発表は，初期中英語における「時」と「場所」を表す副詞句の順序について韻文を中心としたコーパス A Parsed Linguistic Atlas of Early Middle English（Truswell et al. 2018）を用いて調査を行う。先行研究では，古英語期では「時」が「場所」に先行する割合が高かったのに対して，中英語期を経て次第に「場所」が「時」に先行するように変化したことが散文コーパスによる調査で明らかにされている（Chrambach 2014, 2019）。中世英語の語順研究では，OV 語順から VO 語順への移行に大きな関心が寄せられてきた一方で，他の要素の順序にはあまり注目されてこなかったことが指摘されている。また，調査には散文が用いられることが多く，韻文は複雑な要因が関与することから

避けられてきた。本発表では，先行研究の枠組み（Chrambach 2014, 2019）を援用しつつ，初期中英語の韻文における「時」と「場所」の順序やその方言差を明らかにし，脚韻が及ぼす影響についても分析する。

9:50～10:30　司会　野地　薫（駒澤大学他非常勤講師）

12.「賄い屋の話」から見る『カンタベリー物語』の「巡礼」の変容について

本田崇洋（福島工業高等専門学校）

『カンタベリー物語』の巡礼の動機の一つは物語を聞くことにあるが，「賄い屋の話」のプロローグでは，語り手が居眠りするなど，動機の鈍化がみられる。また，話の中には，軽率な言葉の危険性，自制の重要性が忠告される。多くの巡礼者は，すぐ怒ったり，欲望に従順であったりと，自制とは程遠い。多くの物語は軽率な人間の言葉で作られており，「賄い屋の話」は，『カンタベリー物語』の巡礼の動機の脆さが示されている。断章Ⅰでは，生命の再生，活動の息吹が象徴され，死の受容や日常世界の笑いが描かれる。断章Ⅱ以降では，運命の女神で象徴されたこの世の不安定さが描かれる。終盤で語られる「賄い屋の話」では，冒頭で挙げられた理想や規則が反定立として提示され，主人公はこれまでにない悲劇をもたらす主体的な人物として描かれる。終盤の物語からみた『カンタベリー物語』の終局の一つの様相とチョーサーの巡礼の変容を考察する。

10:40-12:20　ラウンドテーブル（総合研究棟Ⅳ（工学系２号館）2F 223L 講義室）

「承前啓後―日本におけるこれからの中世英語英文学研究を考える」

司会　Britton BROOKS（九州大学）
狩野晃一（明治大学）

日本中世英語英文学会の創立40周年を記念して，日本における中世英語英文学研究の将来像を描こうとこのラウンドテーブルを企画した。この40年の間，古英語・中英語の語学・文学，書誌学や翻訳の緒分野で，新しいアプローチ，方法論，研究に対する要請など多くの変化があった。国内外の人的交流は近年ますます増加し，またかつては研究者が海外の図書館や文書館に出向いて高価な調査をすることでしか中世写本にアクセスできなかったのが，今では資料の電子化によりアクセス環境が飛躍的に向上した。研究手法についても学際的なものが増え，ヨーロッパ文学との関連，歴史学，美術，社会科学との融合，言

語理論の応用，さらには文系と理系のコラボレーションが必要となってきている。中世英語英文学研究の日本における現状はどうか，そして将来はどうなっていくのだろうか。研究者の裾野を広げ，関心を持ってもらえるようにするにはどうしたら良いのか。現在まで積み重ねられてきた日本における学知を大切にしつつ，日々目覚しい発達を遂げている新しいツールの扱いやアプローチに秀でた学生／研究者をどうしたら育成できるのか。様々なテーマを扱う研究者から現段階における問題意識の提示と将来への提言を行なってもらうことで，日本における中世英語英文学研究のさらなる40年に向けて希望の道筋を示すことができれば幸いである。

1．インターネット時代の中世英語英文学研究

唐澤一友（立教大学）

インターネットやそれに付随する様々な機器等の発達により，日本に居ながらにして遠方の写本，書籍，論文，データベース等を簡単に参照できるようになり，また，海外の研究者とのコミュニケーションも非常に円滑に行えるようになった。このような環境が整い，地理的に離れていることもそれほど大きな障壁とはならなくなった今，この環境を活かし，日本というくくりに捕らわれず，より広く世界に目を向け，そこで活躍すること，また，これを視野に入れた後進の育成をすることが今後の日本の中世英語英文学研究の再活性化につながるのではないか。世界規模で考えた場合，研究発表や論文・書籍出版のチャンスはいくらでもあると言って過言でないし，海外での業績は国内でも高く評価される傾向にあることを考えれば，就職の際にも，あるいは科研費取得の際にもこれが力となることが期待される。そのような観点から，まずは少数でも国際的に活躍できる研究者を育成できれば，そこからさらに同様の後進が育つことが期待され，長い目で見れば，日本の中世英語英文学研究の活性化につながるのではないか。しかしそのためには，まず自らがそのような研究者でなければならず，そのためには自らが地道な努力をする必要があるだろう。

2．古英語・英語史の発信とその課題

小河　舜（上智大学）

本発表では，日本における古英語や英語史分野のアウトリーチ活動について議論を行う。インターネットの発達によって，現在研究者間での情報交換は，国内外を問わず即座に行うことができ，国外の研究資料の閲覧や活用も比較的

容易である。これまで以上に研究に関連した情報を効率的に収集できる時代である。一方，情報の収集・発信の形態が多様化している今，中世英語英文学という分野の存続や発展を考えるには，研究の発信形態や様式をうまく選択し活用する必要があると考える。学生数の減少や学会活動の縮小が問題となる近年，個人の研究活動を大学での教育や大学外への発信にも有機的に繋げていく方法を研究者自身が模索することが，特に重要な課題となっていると思われる。発表では，大学内外の古英語や英語史の受容について考察し，個人の研究活動とその発信の課題について議論していきたい。

3．日本における中英語研究はどう変わりうるか

三浦あゆみ（東京大学）

中世英語英文学の国内の教育環境が縮小する中，研究状況は決して悲観するようなものではない。国際誌における論文掲載などにより，海外で認知される日本人研究者が途絶えることなく輩出されていることは喜ばしい限りである。一方で，国内における分野の継承・発展のためには個人のみならず組織による努力が肝要だろう。「中世英語英文学および関連領域の研究を促進し，その成果を公表するとともに，内外の関連諸学会との交流をはかる」ことを唄い，会員の国内における研究活動の基盤をなすべき本学会は，今後の中世英語英文学研究にどのように貢献しうるだろうか。

本発表では中英語の研究に焦点を置き，海外における最近の事例を参照しつつ，日本における当該領域の研究の普及・発展のために本学会や会員が今後果たしうる役割について考察したい。また，発表者の経験に基づき，中英語の教育の現状と将来についても言及し，パネリストや聴衆と意見交換を行いたい。

4．オープンサイエンス時代における開かれた中世英文学研究？

徳永聡子（慶應義塾大学）

中世英文学研究をめぐる近況と最近の研究動向については，その全体像を描いた秀逸な考察があるため（井口篤（2021）），本発表ではその内容を前提としつつ，研究の DX（デジタルトランスフォーメーション）という角度から考えてみたい。学術成果だけでなくそのプロセスをも含めて社会に開き，還元することが期待される，オープンサイエンスの時代を迎えるなかで，人文学研究の在り方も今後大きく問われていくことが予測される。例えば2024年２月には，「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」が決定され，

競争的研究費における2025年度新規公募分から，成果物の「論文及び根拠データの学術雑誌への掲載後，即時に機関リポジトリ等の情報基盤への掲載」が義務づけられる。本発表では，こうしたオープンサイエンスにまつわる最新の動向を踏まえつつ，日本における中世英文学研究の今後について一考を投じてみたい。

5．「それに彼は，海外でより多く話題になっている」：アーサー王物語の日本語への翻訳

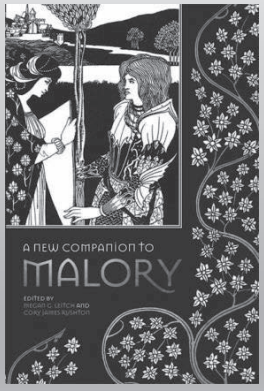
小宮真樹子（近畿大学）

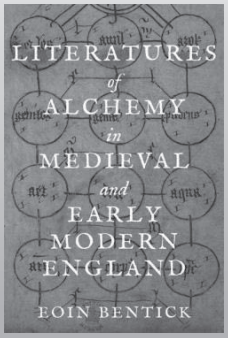
本発表では，アーサー王伝説から翻訳の意義を考える。古代ブリテンの英雄アーサーの物語は，複数の言語に翻訳され発展してきた。マロリーの『アーサー王の死』を1485年に出版したキャクストンも「英国より，海外でより多く話題になっている」と述べている。しかし現在，日本における状況は芳しくない。中世のアーサー王物語は未邦訳や絶版のものが多いのだ。

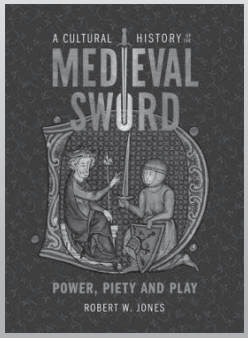
そうした状況で企画されたのが『アーサー王，多言語・古典作品を遍歴すること』（2024年刊行予定）である。この書籍ではさまざまな言語を専門とする研究者に，知られざるアーサー王物語の名場面を翻訳してもらった。世界各地から集ったという，円卓の騎士たちを意図した構成である。

この本から，中世文学の翻訳に関する２つの利点を論じたい。日本語にすることは裾野を広げ，未来の研究者の育成に繋がる。また訳者にとっても，自らの知識を深める絶好の機会となる。ひいては，学会全体の活性化に貢献するであろう。

BOYDELL & BREWER







www.boydellandbrewer.com

バイロン事典 新刊
日本バイロン協会編
初期の構想より10年余の歳月を要して刊行する待望の本格的事典。
田吹長彦編集主幹／A5上製・528頁／定価 本体5000円＋税／
ISBN9784-7553-0439-2

テクスト批評の実践
英語圏文学・映画・漫画　**関西批評理論研究会編**
批評理論を平易に解説しながらテクストを読み解き、味わう9論考。
金子幸男・藤田憲司・真田満・水口陽子編著／四六上製・308頁／
定価 本体3200円＋税／ISBN978-4-7553-0444-6

『帰郷』についての10章
小説の読み方・論じ方　十九世紀英文学研究会編
ハーディの名作『帰郷』を21世紀視点から読み直す10の試み。
渡千鶴子責任編集・北脇徳子・木梨由利・筒井香代子編著／
四六上製・216頁／定価 本体2800円＋税／
ISBN978-4-7553-0443-9

コメディ・オヴ・マナーズの系譜
王政復古期から現代イギリス文学まで
コメディ・オヴ・マナーズの系譜を劇と小説の面から考察した11論考。
玉井暲・末廣幹・岩田美喜・向井秀忠編著／A5上製・284頁／
定価 本体3300円＋税／ISBN978-4-7553-0431-6

英国二九世紀小説の光景
海老根宏文学論集
英文学の精髄を作家・作品論を通し平易な文体で伝える大部な著作。
海老根宏著／A5上製・572頁／定価 本体4500円＋税／
ISBN978-4-7553-0433-0

『クラリッサ』を読む、時代をよむ 新刊
「クラリッサ」(1748) の社会的背景と作品の分析を通しその魅力を伝える。
塩谷清人著／四六上製・240頁／本体2500円＋税
ISBN978-4-7553-0445-3

音羽書房鶴見書店
〒113-0033　東京都文京区本郷 3-26-13　☎ 03-3814-0491　Fax 03-3814-9250
https://www.otowatsurumi.com　e-mail: info@otowtsurumi.com

中世英文学の日々に ―池上忠弘先生追悼論文集―
チョーサー研究会／狩野晃一 編 A５判／248 頁／定価 3,080 円 978-4-269-72156-2 中世英語英文学研究において多大な業績を残した池上先生に捧げる15 の論文集。英語やそれによる文学だけでなく歴史や文化も広く知るべきという池上先生の言葉どおり、多様な視点を盛り込んだ論考群。

中世英国ロマンスへのいざない ―田尻雅士遺稿集―
金山亮太／藤井香子 編 A5 判／256 頁／定価 3,300 円 978-4-269-72096-1

イギリス中世演劇の変容 ―道徳劇・インタルード研究―
宮川朝子 著 A5 判／284 頁／定価 3,300 円 978-4-269-71000-4

中世ヨーロッパ物語集 Medieval Legends 小宮山博 著 三浦常司／今井光規 編注 A5 判／126 頁／定価 2,090 円 978-4-269-71000-4

英宝社
〒101-0032 東京都千代田区岩本町 2-7-7
TEL：03-5833-5870 FAX：03-5833-5872
E@eihosha.co.jp https://www.eihosha.co.jp/

朝日出版社

審査用見本デジタル版 閲覧サービスのご案内

朝日出版社では、従来どおり紙媒体での教科書見本に加えて、新たに「審査用見本デジタル版」閲覧サービスを開始いたしました。教科書をご審査いただくにあたって、時間と場所にとらわれず、さまざまな教科書の見本をパソコンでもスマートフォンでもご覧いただけるようになります。是非ご活用ください。

「審査用見本デジタル版」を閲覧いただくには、IDとパスワードでのログインが必要となります。ご登録用IDとパスワードの発行をご希望の際は、右記サイトよりご登録のお手続きをお願いいたします。

https://text.asahipress.com/special/publuslite/

朝日出版社 電子見本 検索

審査用見本デジタル版 トップページ

審査用見本デジタル版 見本例

お問い合わせは右記の朝日出版社英語テキスト課へお願いいたします。 朝日出版社英語テキスト課：text-e@asahipress.com